

数多の利点を有している。反之後方より discotomy も併せ行つた脊椎固定術は固定でなく単に脊椎制動術でしかない。一方, 分離症に就いてはミエロに所見を有するものは前方より, 他は原則として後方より手術を行つた。前方法で 6 例中 2 例に分離部の完全閉鎖, 3 例は殆んど閉鎖したのをみた。後方手術法相互に優劣の差認め難いが, 椎体固定のものが 2 椎体固定のものより, 又キレッツ型のものが仮関節型のものより成績良好であつた。前後屈時斜位レ線像で分離部修復状態を確認出来た。

19) 電気衝撃療法後にみられた脊椎側彎症について

千大大学院 松原 保

脊椎側彎症の病因に関しては現在尚不明の点が多い。私は今回側彎症の病因の一端を解明するものとして, くりかえし背筋に収縮の強制される電気衝撃療法に着目し, 本学精神科, 国立国府台病院, 沼津千本病院, 国立下総療養所に入院中の患者につき側彎症の面より集団検診を施行した。調査人員は電気衝撃療法を受けたもの 326 名, 受けないもの 123 名計 449 名につき行つた。まず脊柱を触視診にして検査し, 異常ありと思われた者につきレ線撮影を施行した。

レ線上側彎ありと診断したものは 50 例, このうち脊椎圧迫骨折を思わせた 6 例を除き 44 例につき分析を加えた。その結果古くより言われている myopathic theory も考慮すべきだとの結論に達したのでここに報告する。

20) 脊椎側彎症の実験的研究 (第 1 報)

千大大学院 辻 陽雄

側彎症の病因, 治療に関する基礎的検討を目的とし, 近交系家兎, ウィスター系ラットを使用せる知見の一端を述べた。

実験発生法, 手術的方法として椎体侵襲各種方法, 後部脊柱に対する各種侵襲, Müller 氏強制側彎, 非手術的方法としての Radiation 薬物投与, 突然変位により作成せる遺伝性の Fused Tail Mouse 等約 50 匹につきレ線的に経過を観察し, 側彎度との関係を追求せる結果, 側彎発生は, 椎体自体よりむしろ脊椎後部の要素を重要視し, 更に Semicarbazide による軟骨板, 椎間板代謝異常の素地の上に背筋力等の要因累加により高度の側彎が発生した事からその病因は一元的のものとは考えら

れない。

一方 Müller 氏強制側彎脊椎の組織学的所見, 及びその ³⁵S Macro et Micro-autoradiography 所見から凹側軟骨板及び椎間板の特異的变化を認め, 凹側軟骨板の成長抑制が, やがて側彎発生の一次的要因となり得る事を推論した。

21) 教室における脊椎側彎症の研究

千大整形 °石川 芳光, 五味 潤一
千大大学院 井上 駿一, 石川 正士
久米 通生, 辻 陽雄

脊椎側彎症について教室で治療を行なつた患者は 66 例で中 9 例に観血的治療を行なつた。側彎症は特異性, 次いで先天性のものが多く, 部位は胸椎部が多い。本邦における側彎症の実態を明らかにし, ひいては早期診断, 早期治療の目的のため小, 中学生 10,119 について集団検診を実施し, X 線撮影を行ない 1.0% に Structural Scoliosis を認めた。

側彎症の病態については動物実験によりその発生要因探究, アイソトープによる代謝の研究を行ないつつあり, 治療症例については, レ線的, 筋電図学的, 心肺機能, 生化学的に検討を行なつている。

保存的には簡易 Extension Corsette, Turnbuckle Jacket, Milwaukee Brace などによる治療を主としている。観血的には新しい試みとして Bertrand による椎体凸側の Stapling に凸側軟骨板切除を加えたもの, 凹側肋骨切除に肋骨横突起切除と肋骨移植を加えたもの, Steindler 氏法変法により脊椎固定を行なつた例などあり経過観察中である。更に Torsions Gleiten に属する 1 例に経腹膜的前方椎体固定を行なつた症例を報告した。以上につき聊かの考按を加え, 早期診断について椎体の変化, 傍脊柱部軟部陰影の変化についても言及した。

22) ペルテス病の成因に関する研究

千大整形 °斯波 隆, 竹内 孝
齋藤 長生, 中島 宏

ペルテス病の成因として従来幾多の説があげられているが, そのレ線像, 病理組織所見より近年血行障害が重視されて来ている。我々は血管撮影により大腿骨々頭部血行のレ線学的研究を行ないペルテス病における血行障害について検討を行なつた。

検査対象は 4 才より 11 才のペルテス病 23 例 (28 股関節) で骨頭核よりの Intraosseus Venography により全例に年令, 症例に応じた還流障害が観察さ

れたが、一般に骨頭扁平、濃厚像を示す初期に於ては、支帯、メタフィース両還流とも高度に障害され、その修復機転は病変部骨端軟骨板を介してメタフィース血管、頸部支帯血管との交通により行なわれている。又大腿動脈よりの動脈撮影により、少数の経験ではあるが骨頭主栄養血管である上支帯動脈に由来する動脈性血行障害が観察され、これ等の知見に基づき、家兎の支帯血管結紮実験を行ない、ペルテス病類似の骨頭変形の発現を認めた。

以上の諸知見よりペルテス病が血行障害に基因することを明らかにし、大腿骨々頭血管の解剖的特異構成、ペルテス病患者の一般検査所見よりその発生機序に2, 3の考察を加えた。

23) 整形外科領域における理学的ならびに薬物学的療法の電気生理学的研究

千大整形 河野保久, 富田 裕
石田三郎, 斎藤 篤
千大大学院 立岩正孝, 大井利夫

整形外科領域に於ては、麻痺性疾患に対する理学的、薬物学的療法は一つの重要な分野を占めている。我々がかねてより、誘発筋電図学的な観点に立つて神経筋系に対する研究を行なつて来たが、今回は筋萎縮性麻痺性疾患における治療法について便宜上、理学的療法と薬物学的療法に分けて、電気生理学的な検討を行なつた。得られた成績は次の如し。

1) 低周波直角脈波の末梢神経通流に際しては、通流電極の治療的効果を期待して、陽極を治療導子とする通流法が合理的である事を臨床的に実証した。

2) 麻痺筋に対しては、治療導子の温熱作用と極作用を期待して、15 c/s~120 c/s の陽極閾上通流を行なう事が望ましい。

3) 神経筋接合部に対する支配神経を介しての強縮刺激の治療的効果の可能性を認めた。

4) ワグステグミン、ガランタミンの作用機序及びその量的関係について筋張力を指標として観察し、後者は前者に比して、効果の持続時間が長い事を確認した。又 ATP との協力作用を認め、併用投与の利点を実証した。

24) 教室における骨腫瘍の血管造影について

千大整形 中島 宏

(抄録未提出)

25) 悪性骨腫瘍に対する Radiostrontium (^{85}Sr) の診断的応用 (第3報)

千大大学院 西川 侃介

R. I. の臨床的応用として我々は骨ミネラルとしての Ca と類似の ^{85}Sr を用いて悪性骨腫瘍へのとりこみを探索している。その手段として未だ報告のない Linear 及び Area Scanning を用いて体内における Isotope の動的かつ量的変化を連続的に記録することに成功している。

しかし組織所見と Scanning によるとり込みの相関性についてはまだいろいろと検討すべき余地が残されている。

今後とも基礎的研究、装置の改善と共に症例を重ねて悪性骨腫瘍の早期診断に役立てたいと思う。

26) ベリリウム腫瘍発生経過

(実験骨腫瘍の研究中間報告)

千大大学院 平山 守

発癌性の化学物質は可成りの数が発見され、動物実験でその有害性が確められているが、近來化学工業で脚光を浴びて来た Be-Compound も又家兎に対して発癌性を有する。1946年 Gardner & Heslington らは兎耳静脈に BeO , ZnBeSiO_4 を注入し、Osteogenic Sarcoma の発生を見たが、私は兎大腿骨髄内及骨腔周囲注入により肉腫発生を計り、又一般検査に依りその発生経過をたどつた。

注入後6カ月では組織的に Metaplasia の段階でいまだ悪性化の徴は見られてはいない。

27) 1) 所謂Ostitis Condensans ilei の2例

2) 非定型的脊椎分離症の1例

羽津病院整形 石田三郎
外科 北村太郎

1) 1例目は28才、家婦で主訴腰痛、妊娠・分娩に関係ある Ostitis Condensans ilei で2例目は34才、家婦で主訴腰痛、妊娠分娩に関係なく偶然発見されたものである。我々は先人の記載に従いそのレ線像の特異性は肯定するが腰痛との関係、成固、組織学的探索等についてなお多く考究されるべきだと思ふ。

2) 37才、男で、長期腰痛に悩みレ線像で第1腰椎右椎弓部に滑らかな辺縁を持つ椎弓裂隙を持ちなおかつ同椎骨左側横突起に骨端核存続を有する例を経験し、脊椎分離症との類似により、非定型的脊椎分離症とした。レ線の検索により他の腰痛の原因が